

木子茂句集

文章、俗姓は内藤にして、世々尾張の國犬山の城主に武を以て仕ゆ。文を右にして和漢の才あり。若きより佛乘に歸して玉堂和尚の禪意をつたへ、奉公を辭して薙髮す。

偈曰、多年負屋一蝸牛、化做蛭蟪得自由、火宅最惶涎沫盡、追尋法雨入林丘。發句、涼風にきゆるを雲のやどり哉。と云々。終に故郷を去りて、湖南の粟津龍が岡に茅屋をむすび、佛幻庵と號し、芭蕉翁を開祖とす。ちかくまでその跡ありて、岡の堂といふ。翁の滅後、山に籠りて師恩の（を）報ぜんために、一石一字の法華經を書寫して墳に築く。元祿十七年（三月、寶永と改元す）の春二月廿四日病床に坐化す。塚は龍が岡の東林の中にあり。正秀が墓になるとなる。

又子度白集

春

うぐひすや茶の木畑の朝月夜
竹簀戸のあふちこぼつや梅の花
床脇は梅さくかたか荷茶屋
待ことは梅にあるかも茶搦子木

奉納

梅がゝや湯立の跡の炭の切
片屋根の梅ひらきけり烟出し
遅望が新宅を賀す。

水仙に作事は済で梅の客

尾張の國に春を探りて

うめの花ちり初にけり儼追風

芭蕉翁の往昔を思ふ。

梅が香にまよはぬ道のちまたかな
引よせてはなしかねたる柳かな
我事と蹶の迺し根芹哉

寒だけは寒く、土用だけは暑
し。春ひとりなんぞ餘興なき
や。

〔一翁四哲集〕に「寒は寒だ
け寒く、土用は土用だけ暑
し、春ひとり餘興なからん
や」とあり

春だけはもちのこさぬやおもしろみ
背戸中はさえかへりけり田螺がら

里の男の田螺がらを水底に沈
め、まち居たれば、腥をむさ
ぼる鯰のいくらともなく入こ
もりて

入替る鯰も死ぬに田にしがら
取つかぬ心でうかぶ蛙かな

梅本寺に遊びて

松風をうちこして聞蛙かな

艸菴

火をうてば軒に啼あふ雨がへる
のら猫やうかれ行ほど松の中
歸る空なくてや夜半のやもめ鴈
眞野雄琴雲雀にとゞく煙かな

朝ごとに同じひばりか屋根の空
支考饒別

松風の空や雲雀の舞別れ
燕の鴈に問てや鳩まはり

芦文に別るゝとて

落付のしれぬわかれや風巾
大原や蝶の出てまふ臘月
陽炎に隣の茶さへすみにけり

芭蕉翁の墳にまふてゝ我病身
をおもふ。

かけろふや墓より外に住ばかり
春雨や何からいはん嵯峨戻り
はるさめやぬけ出たまゝの夜着の穴

身を風雲にまろめ、あらゆる

乏しきを物とせず、たゞ一ツ

の頭の病もてるゆへに、枕の
かたきを嫌ふのみ、惟然子が
不自由なり。蕉翁も折くは是

を戯れ興ぜられしに（はカ）、
此人はつぶりにのみ客を持
人なりとぞ。此春故郷へとて

湖上の草庵を覗ける。猶す
ふ遠き山村野亭の枕にいかな
る木のふしをか偲て、残る寒
さも一入にこそ。と後見送る
岐にのぞみて

木枕の垢や伊吹に残る雪
閑居

朝夕にせまる火燵や春のたし
白妙に月夜鳥や花の奥
眞先に見し枝ならんちるさくら
角入れた人をかしらや花の友

更に劉伶が鋤を備しと興じて

醉死ぬ先から花のうづみけり
うかくと来ては花見の留主居哉
嵩の輪の崩て入るや山櫻
花曇り田螺のあとや水の底
死だとも留主ともしれず庵の花
塗樽の庵に立よる花見かな
花ちるや覗あひたる岩の穴
水壺にうつるや花の人出入

片尻は岩にかけたり花むしろ
ちるかたは志賀にしておけ漢の花
木啄や枯木をさがす花の中
笠松に舞もどりけり花の友
小壘の火燵ぬけてや花の下
洛東の花

落こむや花見の中のとまり鳥
病中

山がらは花見もどりや枕もと
夕ばへや花の波こすあらつゝみ

饒別

見送りの先に立けりつくくし
咲立て柴のならぬや躑躅山
さし覗く窓へつゝじの日足かな
あぐらかく岩から下や藤の花

齋讃

何の葉の影ぞねちむく雉子のてり
三月や冬の景色の桑一本
三月盡
明ぬ間は星もあらしも春の持

夏

時鳥啼や湖本のさゝ濁り
飛込だまゝか都のほとゝぎす
子規瀬より上のわたりかな
川越の渡(途)中に立や郭公
ほとゝぎす誰にわたさん川むかひ
啼ぬ間よ空一ぱいの時鳥
菜種がら焚や野風の子規
杜鵑なくや榎も梅さくら

この句「嵯峨日記」には史邦の
句とす

しるべして山路もどせよ杜宇
山道や壺荷にひびく時鳥
嵯峨にて

鹿追の寐入るや藪の杜鵑

木曾川のほとりにて

ながれ木や篝火の上の不如歸

月夜の松原に酔出て

狂亂のけいこの中にほとゝぎす

遊三長命寺一

笋の鮮を啼出せ郭公

寐て待や梅田枇杷麥蜀魂

屋の棟の麥や穂に出て夕日影

杉なりにせり上りたる田植かな

谷風や青田を廻る庵の客

松風を中に青田の戦ぎかな

夕ばへや茂みにもるゝ川の跡

去來が落柿舎にて

芽出しより二葉に茂る柿の實

(この句「小文庫」秋之部、去來

の「やがて散る」の句の前書に

よれば史邦の句なるが如し。

『嵯峨日記』の一本にも亦史邦

の句とせるものあり)

はね釣瓶蛇の行衛や杜若

青雲や馬鉄やすむる菫の芥子

畫鐘や若竹そよぐ山づたひ

子につれて歸る青みや去年の竹

草芝を出るほたるの羽音かな

はしりこむ螢の中や谷の水

螢火や蟹のあらせし庭のへり

豐後龍門寺の瀧

螢火や村中に取りる瀧の水

曲水の子を悼

呼聲は絶てほたるのさかり哉

やう／＼と出て啼時かかんこ鳥

仰木の里書懷

おのが音の尼や水鶏の磯の闇

血を分しものとおもはず蚊のにくさ

朝日さす紙帳のうちや蚊の迷ひ

衰病倚人

行先にのがれ入り蚊帳のうち

魯九刺髮せし時垂辭(垂示カ)

蚊帳を出て又障子あり夏の月

陳明や蚤の出てゆく耳の穴

電のさそひ出してや火とり虫

梅本寺より歸るとて

蟬啼やわかれて上る軒の山

夕立のかしら入たる梅雨かな

美濃の關にて

町中の山や五月の上り雲

白雨にはしり下るや竹の蟻

夕立に飛のく月や松のうへ

涼しさに寐よとや岩のくぼたまり

小屏風に山里すゞし腹の上

あら壁や水で字をふく夕すゞみ

つゝ立て帆になる袖や涼ぶね

草臥の根ぬけや澳の畫すゞみ

すゞしさの心もとなしつたうるし

丈山の像

さか様に扇を懸て猶すゞし

大山にて市中苦熱

涼しさを見せてやうごく城の松

ぬけ果し納涼のあとや縁の月

四梅庵の納涼

打水にのこるすゞみや梅の中

漣笠に受合せけり蓮の露

浦舟の頭へしに匂ふ蓮かな

惟然行脚を送りて

炎天に歩行神つくうねり笠

雨乞の雨氣こはがるかり着哉

元春法師身まかりけるに

世の中を投出したる團扇かな

旅行

帷子にあたりまりまつ日の出かな

梅本寺を立出るとて

雨乞に先立けふややぶれ笠

秋

朝夕べ秋の廻るや原の庵

夜明まで雨吹中や二ツぼし

精霊のすかれし人をあつめけり

聖霊の隣ありきや山の上

魂棚や藪木をもるゝ月の影

精霊も出てかりの世の旅寐哉

舊里に歸りて

精霊にもどりあはせつ十年ぶり

送り火の山に上るや家の數

稻妻のわれて落るや山のうへ

夜舟より上りて酒堂亭に眠る

いなづまや夜明て後も舟ごゝろ

悔いふ人のときれやきりぐす

行燈に飛や袂のきりぐす

宵までや戸にうたれたる蟋蟀

踊子のかへり來ぬ夜や蜚

寒けれど穴にも啼すきりぐす

きりぐす啼や出立の膳の下

物かけて寐よとや裙のきりぐす

寐がへりの方になじむや蟋蟀

つれのある所へ掃ぞきりぐす

病床

虫の音の中に咳出す寢覺哉

啄木の入まはりけり藪の松

はせを翁に文通の奥に

まねけどもとどかぬ空や天津鴈

(この句は丈草が大山勤仕中
芭蕉を敬慕して、遙かに贈
りし書簡の末に記せしもの
なりと云ふ)

山はなやわたりつきたる鳥のこへ

ぬけがらにならびて死る秋の蟬

旅中

蜻蛉の來ては蠅とる笠の中

啼はれて目ざしもうとし鹿の形

北嵯峨や町をうちこす鹿の聲

あれこれと思ひはづれる花野かな

早稻の香や雇出さるゝ庵の舟

名月や雨にはりあふ風光

名月や車きしらす辻番屋

辻堂に巢たてこむ月夜かな

戸を明て月のならしや芝の上

から樽を漏にあてけり月の雨

野山にもつかで晝から月の客

京筑紫去年の月とふ僧仲間

淀川の邊りにて

舟引の道かたよけて月見かな

發句してわらはれにけりけふの月

此句は林之助といひける九

歳の時、はじめて言出せる

句のよし。

友すれの舟に寐付ぬ夜寒哉

答見寄山菴

燒栗も客も飛ゆく夜寒かな
病人と撞木に寐たる夜寒かな

洛の惟然が宅より故郷へ歸る

に

鼠ども出立の芋をこかしけり

鷄頭に置いて逃るや笠の蠅

鷄冠(頭カ)の晝をうつすやぬり枕

つり柿や障子にくるふ夕日影

木づたふて穴熊出る熟柿哉

落柿余すたれけるこ

澁柿はかみのかたさよ明屋敷

谷ごしに鳴子の綱や窓の中

居風呂の下や案山子の身の終

借かけし庵の噂やけふの菊

嵯峨にて

竹伐の外には見へず菊のぬし

芦の穂や顔撫上る夢さかり

あしの穂や蟹をやらひて折もせず

早咲の得手を櫻の紅葉かな

稻積に出るあるじや秋の雨

松の葉の地に立ならぶ秋の雨

ねばりなき空をはしるやあきの雲

伊賀へこす時おとき峠にて

いひおとす峠の外も秋の雲

飼猿も秋はことさら山のかへ(聲)

旅復を見にはよらぬに秋の池

青空や手さしもならず秋の水

歸り来る魚のすみかや崩れ築

堂頭の新蕎麥に出る麓かな

夜嘶の長さを行ばとこの山

須磨の浦

詠あふ秋のあてどや寺と船

行秋や梢にかゝる匏厨

行秋の四五日弱る薄かな

冬

雷落し松はかれ野の初しぐれ

一方は藪の手つだふ時雨かな

黒みけり沖の時雨の行處

幾人かしぐれかけぬく瀬田の橋

鳥の羽もさはらば雲のしぐれ口

屋根葺の海をふりむく時雨かな

鍋もとにかたぐ日影や村しぐれ

風雲や時雨をくぐる比良おもて

東湖あたりの冬空を吟じて

むきたらで又や時雨のかり着物

越中翁塚手向

入月や時雨るゝ雲の底光

海山のしぐれつきあふ庵の上

所思

もたれたる柱も終に穢しぐれ

芭蕉翁病中新禱の句

峠こす鴨のきほひやもろきほひ

はせを翁の病床に侍りて

うづくまる薬の下の寒さかな

傷亡師の終焉一

曉の暮もゆるぐや千鳥數寄

芭蕉翁追悼

ゆりすはる小春の湖や墳の前

芭蕉翁の七日くもうつり行
衰さ、無名庵に偶居して心地
さへすぐれず、去來が許へ申
澄る。

朝霜や茶湯の後のくすり鍋

國々の墓所も同じ蕉葉の霜
にしらめる。三年の喪は疎な
らぬ中に、湖上の木曾寺はそ
のまたき姿を収て、人々の
ぬかづきよる袖の泪も、一し
ほの時雨をすゝむる。舊寺の
夕より朝をかけて、梵廷吟
席のつとめぬもごろ也。然ど
も野衲はひとり財なく病ある
身なれば、なみくの手向も
心にまかせず、あたり近き谷
川の小石かきあつめて蓮經の
要品を寫し、その菩提を祈り
その恩を謝せん事を願へり。
誠に今更の夢とのみ驚く心喪
のかぎり、筆を投うち手を
拱して、たゞ墓前の枯野をみ
るのみ。

石經の墨を添けり初しぐれ

芭蕉翁七回忌追福の時法華經
頓寫の前書あり。

待うけて經かく風の落葉哉
水底の岩に落つく木の葉かな
風のあたり處やこぶ柳

奈良の玄梅、蕉翁の

こがらしの身は竹齋に似た
る哉

といへる句を夢見てその翁の
像を書て讃歌けるに

木がらしの身は猶かろし夢の中
飛かへる岩のあられや窓のうち

山中泊

電ふる宿のしまりや簀の夜着
はつ霜の泥によごれつ草の色
思はずの雪見や比叡の前うしろ
雪空の片隅さびし牛の留主
狼の聲そろふなり雪のくれ
納豆するとぎれや嶺の雪おこし
ふりかへて山から見たし雪の窓

狐なく岡の蜃間や雪曇り

野も山も雪にとられて何もなし
さかまくやふりつむ峰の雪の雲
おれあふて中行道や雪の友
都の人に申し遣しける

山雲のあまりをやれば京の雪
嵯峨の野明別荘にて

柴の戸や夜の間に我を雪の客
去來が菴を訪ひ來れるに別る
るとて

雪曇り身の上を啼鳥かな
村雲の岩を出るや雪吹の根
しまき來る雪の黒みや雲の間
淋しさの底ぬけて降みぞれかな
背戸口の入江に上る千鳥かな
さよ千鳥庚申待の舟屋形
水底を見て來た顔の小鴨哉
夜がらすをそやし立けり鴨のむれ
霜腹の寐覺くや鴨の聲
櫓の火や曉がたの五六尺

草庵の火燵の下や古狸

下京を廻りて火燵行脚かな

ほた／＼と朝日さし込火燵かな

守り居る火燵を菫の本尊かな

吹嵐あらしや今は山やおもふ

行曉の寐覺なりしを、といふ

を誦して

山やおもふ紙帳の中の置火燵

炭賣や隣の人が焚に行

紙子着てよれば火燵のはしり炭

貧交

まじはりは紙子の切を譲りけり

一夜さに猫も紙子もやけどかな

居寐さへかゝらぬ物なりけれ

ば立別るゝ宿の跡もさこそと

思ひて

踏やぶる紙帳の穴や置土産

鶏の片足づゝや冬ごもり

しづかさを數珠も思はず網代守

舟岡に影氷すや鉢たゝき

一月はわれに米かせはちたゝき

うら門の竹にひびくや鉢蔽

長崎卯七渡鳥撰集の時

句撰やみぞれ降夜のあられ酒

水風呂に寛しかけて谷の柴

鷹の目の枯野に居るあらしかな

神松のさえこむ影や禰宜の夢

黒海苔は雲海苔ともいふ。岩

間に降つもれる雪の日に照さ

れて此物とはなれりとぞ。浪

化より恵れしにとりあへず。

海苔の名やたゞうち見には雪と墨

あら猫のかけ出す軒や冬の月

雪よりも寒し白髪に冬の月

獨法師は中／＼の手廻しにて

煤掃や山風うけて吹通し

寒は既望の日より明て風景殊

更に悠然たり。

十五日春やのしこむ年の暮

行燈を消せば鼠のとし忘

追鳥も山へ歸るか年のくれ

あふまき年ふ月 翠樹堂

蓬門仙館書林

井筒屋流多樹

橘屋次多樹

砥竹

追加

うぐひすにとらば菫の風ふせぎ

着てたてば夜の衾もなかりけり

影法師の横になりたる火燵哉

しら粥の茶碗くまなし初日影

酒賣のもどりは樽に野梅かな

子規たしかに峯の早松茸

とゝ川の春やくれ行葭の中

船待の笠にためたる落葉哉

月代やしぐれの中の虫の聲

栗津野や山から京のほとゝぎす

荊口奪られしに

名月の前へ廻るや旅まくら

月花やよきこたへある里の山

賀三助然于山彦撰集一